

代表幹事に就任して

岐阜大学大学院医学系研究科 疫学・予防医学分野

永田知里

このたび代表幹事を務めさせていただくことになりました。こういった役に就かないのが自分の良いところなどと思っておりましたので動揺困惑しましたが、卒業にはいささか若過ぎたとのこと、諦めました。「人生、観念が大事」と前代表幹事の梶村春彦先生には背中を押されました。副代表幹事の井上真奈美先生と庶務幹事の伊藤秀美先生の存在は心強く、頼りにしています。

若い時分は、理学部から医学部に再入学、卒業後一切研修はせず、大学院生時代は産業衛生に所属、疫学に興味を沸き大学院中に米国留学、帰国後は3年近くプー太郎とモラトリアムしておりましたが、疫学を専門と選んでからは長続きしております。乳がんを中心としたがんの疫学から、エストロゲンやメラトニンなどのホルモン、栄養、美肌などの課題も含むようになり、研究対象も成人、妊婦、この10年は幼児、学童と変遷しています。研究会総会に出席した際には、発表を聞きつつ、これら主流とは異なる研究は何かばかり考えるニッチ好みで、分子疫学の知識もありません。それが代表幹事に就任したのですから、この分野の研究動向を把握し、学界そして世の中のニーズも踏まえた上で、この研究会のプレゼンスを高めるよう手を打たねばなりません。自家撞着はともかく、えらい試練に出くわしたようです。

さて観念して、狭いながら自分の周りを眺めますと、気になる点は「組織の力と個人の力のアンバランス」でしょうか。ビッグデータが注目されるよう、高いエビデンスを求めようとする、やはり大きなデータを有する組織が重視され、個人もそのような組織に魅了されます。特にがん自体をアウトカムとする疫学研究はデータの蓄積に年月がかかりますし、それが可能な組織も限られています。若い研究者は、まずは既存のデータを解析して論文化するのですから、その価値は組織にあるわけです。若いうちはともかく、さてその先個人は何を目指すか？組織の方もデータ提供のみに存在するわけではありません。一方、用意されたデータに興味はなく、独創性を重視する人もいます。私は、誰にも真似できない研究をしたいと高い志を抱いて疫学を学び始めた若者が、結局はその後他の道を選んでいった例を経験しています。ただ、大方の若い研究者はある程度業績のためには組織のデータを活用させてもらい、大きな組織でもトップになるのはほんの少数ですから、実力がついてきたら、小さくとも自由度の高い組織で研究をと考えているかもしれません。現存の大学や研究所を見回せば、そんな個人の思いが実現された縮図になっているとは、些か考えにくいですが。

そもそもがん疫学は、データの獲得には組織の力が必要ですし、昔は、方法論も未完成のまま小規模な研究が多くならざるをえなかったものであり、現状は日本における疫学の進歩の証とも言えるかもしれません。いずれ組織も個人も少数のエリート集団に任せるという考え方もあるかもしれません。今後、AIが解析を担うでしょうから、その前がん疫学の担い手が減ってくるかもしれません。将来を考えると、この辺りで私の思考は空転してしましますが、まずはこの研究会が、若い研究者にとって、研究の機会を得られるとともに、自由な発想を伸ばしていけるような場、すなわち、どのような状況でも自分を活かせるよう力を蓄える場であればと思っております。会員の皆様方のご支援をよろしくお願い申し上げます。